

かくされていた愛

ミン キトウ

私の中には、いつも一つの後ろ姿があります。それはあたたかい港のようで、私に何でも挑戦する勇気をくれます。

私の両親は毎日とても忙しかつたので、私は十歳までずっとおばあさんといとこと一緒に暮らしていました。いとこのお母さんは私のことが好きじゃありませんでした。おばあさんがいとこに使うはずだったお金も、私と分けてしまったと感じていたようです。私といとこがけんかした時は、いつもおばあさんはいとこの味方でした。本当は半分にするはずのケーキは、いつもいとこだけのものでした。最後の一つの飴もいつもいとこのものでした。私はおばあさんは私のことをきらいだと思っていました。

すべてが終わったのは私が十歳の時です。

私は十歳の夏から両親と住むことになり、おばあさんと会うことも少なくなりました。私

にと、ておばあさんといとこの日々は嫌な
思い出でした。

けれども、去年母から本当のことを聞きま
した。私は知りませんでした。おばあさん
は私たちを育てるために仕事をやめていたそ
うです。そして、おばあさんはおばさんが私
に対してきびしか、たこと知、ていて、母に
いつも謝、ていたと教えてくれました。それ
を聞いた時、私はなみだかとまりませんでした
た。その時まで、私はおばあさんの後ろ姿に
かくされていた愛に気付いていながら、たので
す。

おばあさんは、ずと私の後ろで静かに支
えてくれていました。日本にいる今のわたし
も、あの時のおばあさんの愛に支えられてい
ます。